地元の高校生が我が地域の新たな魅力を発見し，高校生目線のユニークで新しい情報を発信いたします。

制服譲渡システム「osagari」アプリの開発

～おさがり文化を形にするプロジェクト～

1 はじめに

私たちは、総合的な探究の時間という授業の一環で、SDGsについて学んだ。そこで、持続可能な開発目標に取り組むことの大切さを知った。そして、まずは高校生の自分たちでもできる持続可能な取組みが何かないかを、自分たちの身近なところに引き寄せて考えた。

種子島はIターンによる移住者や、短期留学制度で転校してくる子供たちが少なくない。そういった人たちは、短期間しか制服を必要としないにもかかわらず、地域との関わりが少ないためおさがりをもらうことが困難で、高い制服を揃えなければならないことになる。また、卒業生の中には、まだ使用することができる制服を誰かに譲りたいが、譲り先が無いため処分に困っている人がいる。そのような現状から、私たちは制服等の学用品のおさがりに焦点をあてた。問題を解決する手段として、卒業生から不要となったものを一括して集めて保管し、必要とする人たちが譲り受けるシステムを作るということを考えた。しかし、保管場所や管理者の問題があり、「持続可能」な解決方法とはなりえなかった。そこで、制服等を提供してくれる人と譲ってもらいたい人の仲介を担う方法を構築していけば良いのではないかと考えた。ただしその作業は今後も継続的に行わなければならない。そこで、アプリを通して、制服を必要としながらも譲り受けるあてがない人と処分に困っている人を繋ぐ機会を作ろうと考えた。この取り組みはSDGsの目標10の「人や国の不平等をなくそう」、目標12の「つくる責任つかう責任」につながるものであり、また、その時限りではない持続的な取組みにもなるのではないかと考えた。

2 「osagari」アプリができるまで

さまざまな課題

夏休みを利用し、二人でどのようなシステムのアプリにするか、そのアプリを使うことのメリット・デメリットは何かなどを話し合った。また、制服や体育服など、自分たちの学校で使用している学用品の細かなサイズを制服販売店舗の協力を得てすべて調べた。そして、システムの全体的なイメージ、制服を提供する側、受け取る側の手順を紙にまとめた。その後、自分たちで見直して改善点を話し合ったり、複数の先生に見てもらって違う視点での意見をいただいたりした。その中で、安心して利用してもらうためのセキュリティ問題やアプリの運営は誰がしていくかなど、様々な課題が浮上した。

技術・コスト面の課題

実際、私たちにはアプリを作る技術がないため県内の大学や専門学校に制作を依頼した。しかし、コスト面や制作にあたる期間や時期が合わず協力を得ることができなかった。そこで、私たちはNoCodeでアプリを作成できるというGlideの存在を知り、それを利用してアプリを構築しようと考えた。しかし、Glideを使用してアプリを制作し、かつ維持をしていくには多くの費用が掛かることが分かった。その費用をまかなうためにクラウドファンディングで支援を募ってみてはどうかと考えた。

クラウドファンディング

クラウドファンディングは、CAMPFIREというサイトを利用することにした。どうしたら見ている人が関心をもち、私たちの活動を支援してくれるかを考え、『高校生がアプリで人をつなぐ!?制服のおさがり文化を形にするプロジェクト!!』というタイトルで始めることにした。

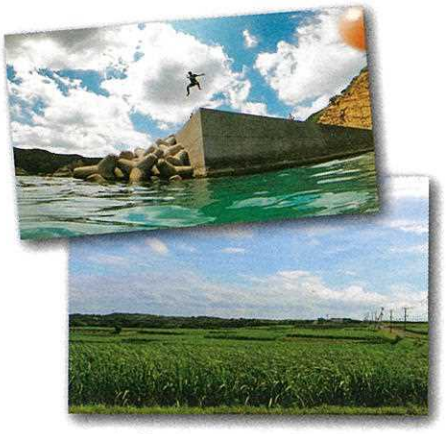
高校生がアプリで人をつなぐ！？制服のおさがり文化を形にするプロジェクト！！

osagari　まちづくり・地域活性化

クラウドファンディングトップ画

クラウドファンディング二次元コード

当初は、十万円という目標を立てたが、結果としてクラウドファンディングでは十七万一千円が集まった。さらに、全国に存在する中種子会の方々から五万円を支援して頂き、合計二十三万一千円が集まった。支援の返礼品として、ブロンズコースはお礼の手紙を、シルバーコースは種子島のおすすめ観光スポットの自作のフォトブック・アプリ制作のレポート・お礼の手紙を、ゴールドコースはそれに加えて感謝状を送った。

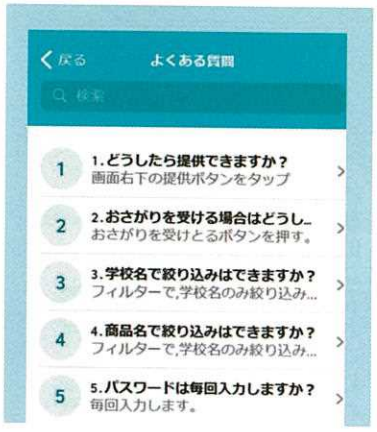


返礼品のフォトブック

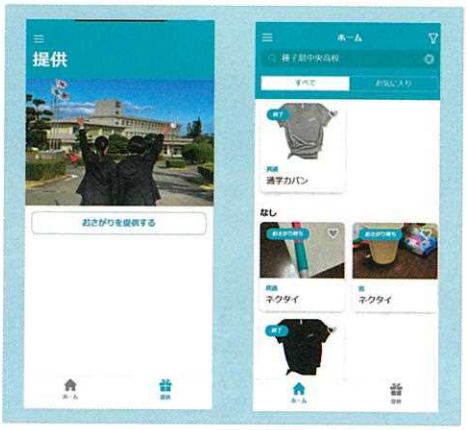
中種子町地域おこし協力隊のサポート

アプリを制作するにあたり、中種子町地域課の地域おこし協力隊の方のサポートを受けながら、以前考えたシステムの全体的なイメージをもとに制作した。

今回、一番問題となったのがGIideのシステムで制服等のやり取りに料金を発生させず、無料で行うため、フリマアプリの「ラクマ」や「メルカリ」のようなカート機能を利用できないという点である。受け取る側が提供を希望したときに、どのような形で提供側へそれを伝えるかという方法についてかなり模索した。そこで、受け取る側が品物を選択し、提供希望を決定すると提供側にメールで知らせるという方法が、最も効率的だという結果に至った。このシステム構築については、地域おこし協力隊の方にお願いすることにした。



【よくある質問】ページ



試作アプリの一部

また、利用者がシステムを動かす上で起こりうる疑問や不安をすぐに解決できるように、使い手の立場に立ちながら「よくある質問」の項目を考えた。アプリについては試行テストを何度か行い、不具合を確かめ、その不具合を修正しながら完成させた。

アプリの仕様について

【提供側】

① 提供情報の入力画面で提供する制服等のサイズ、提供者名（仮名可）、品物の状態が分かる写真、補足説明などを入力する。

② 自動の提供希望メール受信後、受け取り希望者の住所、氏名、電話番号を確認し、受け取り先へ着払いで送る。

③ 郵送完了ボタンを押す。

※この段階で受け取り希望者の個人情報は自動で全て消去される。

【受け取る側】

① ホーム画面に表示されている提供品を選択する。（必要に応じて品物のカテゴリを選択できる）

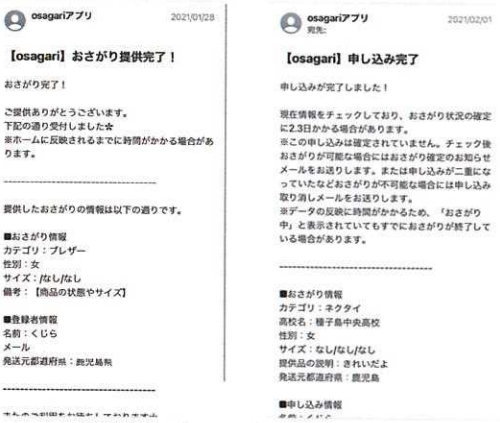
② 希望の品物の候補として「お気に入り」をつけることができる。

③ 提供希望の確定ボタンをクリックし、氏名、住所、電話番号、メールアドレスを入力し、さらに手書き入力パッドで署名をする。

④ 申し込み完了メールが届く。

※同時に提供者にも受け取り希望者の情報がメールで届く。

このアプリは、誰もが利用できる訳ではなく、本校に在籍している人と本校へ入学してくる人のみが利用できるようにしている。そのため、アプリ自体にパスワードがかかっており、定期的にそのパスワードの変更を行うことにした。正当な理由なく利用されることを避け、利用者の個人情報を少しでも守るためである。



提供側と受け取り側の受信メール

実際にアプリを利用する

アプリを実際に始動させるにあたり、まずは本校の当時3年生と新入生を対象とした。

まず、アプリの完成後に本校3年生に概要を紹介する説明会を計画した。事前準備としては、この活動をなぜ行うのかという私たちの思いと、どのような流れで受け取り側に制服が渡るのかをパワーポイントにまとめた。

また携帯端末にアプリのダウンロードを行う際、iPhoneとAndroidでは方法が異なるため、ダウンロードの手順を紙面にまとめて配布した。

2月末の卒業を目前に控えた時期であり、既におさがりを譲る相手が決まっている先輩も多かったが、数人の先輩がその場で協力を約束してくれた。

次に、本校への新入生にこのアプリを利用してもらうために、種子島の中学校を訪問し説明を行うことにした。各中学校の教頭先生に概要をまとめた紙を用いて説明を行い、本校を受験した生徒への紹介・説明と案内用紙の配布をお願いした。例年、合格発表の翌日に合格者説明会があり、説明会後に制服等の採寸が行われる。そのため、合格発表前日の中学校の卒業式に合わせて説明をお願いした。

実際にこのアプリを利用して制服のおさがりの受け渡しを行ってもらったのは、卒業生9人、新入生7人だった。前述の通り、卒業生へのアプリの紹介が遅く、すでにおさがりを譲る相手を決めている人が多かったことで、提供数が少なかったためである。それに伴い、新入生も想定していたより利用者が少なかった。

アプリを運用してから約2ヶ月後に、利用者を対象にアンケートを実施した。アプリの操作のしやすさや提供品一覧の見やすさの他、提供品が届くまでの期間、要望・改善して欲しいところなどの質問をした。アンケートの結果、

・操作は簡単だった。
・提供品一覧は見やすい。
・提供品が届くまで約10日ほどかかった。
・提供品が中々届かない。

などの回答があった。

メディアで広まる「osagari」

アプリ制作を行うなかでクラウドファンディングで資金を募ったが、そのサイトをNHK鹿児島の方と東京FMの方が見てくださり、アプリ制作についての取材を受けることになった。

NHKについては、2月中旬から3月末までの約1カ月半に渡り取材を受けた。最初に、私たちが3年生にアプリの説明をしている様子が「情報WAVE鹿児島」という番組内で2月10日に紹介され、それより具体的な内容は2月25日の「BS4Kニュース」のなかで放送された。

NHK取材の様子

また、実際に卒業生が制服等を提供し、新入生がそれを受け取るという一連の流れを取材した様子が4月7日の「情報WAVE鹿児島」で放送され、同じ内容が4月26日の「BSニュース4K+ふるさと」、4月27日の「おはよう日本」のなかで再放送された。

東京FMにおいては、「HondaSmile Mission」という番組内で取材を受けた。パーソナリティーの方との電話でのやりとりが録音され、3月1日の同番組内で紹介された。放送内容については、東京FM Honda SmileMissionのホームページ(https://www.tfm.co.jp/smile/reports/tokyo/20210301/)に掲載されている。

このほか、電子書籍を出版している方からも取材を受け、amazonのKindle『ノーコード革命』(植村弘明著)の巻頭に掲載していただいた。

NHKや東京FMのような全国放送で紹介をしていただいたおかげで、このアプリのことが広がり、全国からアプリの利用やシステムについての問い合わせが来ている。岩手県の高校と愛知県の中学校からはアプリを利用することを前向きに検討したいと問い合わせをいただいた。そこで、アプリのシステムを各学校に合わせたものにパートナー登録して利用してもらうという形で広めていこうと考えている。

Kindle『ノーコード革命』表紙と掲載ページ

今後について

このアプリは、私たちが高校に在籍している間だけでなく今後も継続的に使っていって貰いたいと考え、アプリ開発を手助けしてもらった地域おこし協力隊が運営している『LOCAL-HOOD』という組織に引き継いでもらい、運営していく。さらに、現在は自分たちの高校でしか利用できないが、その範囲を拡大していきたいと考えている。

県内の大多数の小学校では制服が

指定されている。小学生は特に成長が早く、短期間で制服のサイズが変わるため、このアプリを小学校で是非利用して欲しいと考えている。そこで、まずは島内の比較的規模が大きい小学校2校を訪れ、教頭先生に実際にアプリを動かしながら説明を行ない、保護者への紹介をお願いした。

中平小での説明風景

野間小での説明風景

次に、広くこの活動を広げていくためにホームページ（https://osagari-tanegashima.studio.site/）を作成し情報を発信している。

ホームページトップ画面

3 おわりに

この活動をやってみようと考えたきっかけは、小学生の時に、みんなと違う制服や体操着を着ている転入生を見て、「譲ってくれる人がいたらいいのにな」と感じたことである。せっかく私たちの学校に転校してきてくれたのに、みんなと違う制服で来ているその子を、幼いながらも気の毒に思った。仮に、新しい制服を揃えてもらっても、金銭的な負担がかかることは不平等ではないかとも思った。誰しもが必要なものを同じ条件で手に入れることはできないのか。この思いはいつまでも心の中にくすぶっていたのだ。また、おさがりの状態はとても良く、卒業後に誰かに譲っても、きっと長く着てもらえると思う。では、譲る相手がいなかったら？仕方ないけど捨ててしまう以外方法はないだろう。

SDGsについて学び、他人事でなく自分事として物事を捉え、身近なところから変えていく必要性を実感した時、まず頭に浮かんだのは、制服のおさがりのことだった。リサイクルショップと同じように、欲しい人と譲りたい人をつなぐことができれば、**SDGsの目標12の「つくる責任、つかう責任」**につながるはずである。さらに、高額な制服を転校によって何度も買い直さなくてはいけないという経済的不平等を解消することは、**目標10の「人や国の不平等をなくそう」**にも結び付けることができる。

このアプリを制作する中で、多くの課題が生じた。技術や知識、コスト面、そして「持続可能か」ということだ。しかし、目の前に生じた問題を一つ一つ解決していくことを繰り返す度に、ゼロから自分の頭で問い、考え、言葉にしていく力や協力しながら物事を成し遂げる力を身に付けることができたと思っている。そして、この活動を通して、地域おこし協力隊の方や、クラウドファンディングで支援してくれた方、このアプリを自分たちの学校でも使ってみようと興味を持ってくれた方々と私たち自身がつながりを生むことができた。私たちだけでは叶わなかったが、賛同してくれた人がいたおかげでこの制服アプリは完成したのだ。**目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」**とはこういうことだろうかと思っている。

今後は、私たちのようにSDGsを学んだことがきっかけで、新たな挑戦をしている同世代の人たちと交流し、様々な取り組みをより持続可能なものにするためにはどうすれば良いかを話し合ってみたい。

鹿児島県立種子島中央高等学校
普通科　3年　日髙　千尋
廣濱　葵